

第 58 回日本卵子学会 学術集会

0-13

沖縄, 2017. 06. 02-03

凍結前に収縮が生じている孵化前の胚盤胞は優先して移植しない

佐藤学¹、柴田美智子¹、中野達也¹、中岡義晴¹、森本義晴²

¹IVF なんばクリニック

²HORAC グランフロント大阪クリニック

目的

経時的観察により収縮拡張を繰り返す胚盤胞が認められるようになり、その回数が多いほど胚盤胞脱出やその後の予後に障害がでることが明らかとなっている。この評価には経時的観察が必要でコストもかかる。なるべく簡便に、かつ経時的観察機器の導入なしで評価できないか、収縮に関するチェックポイントを凍結前に設定してその予後との関連を調べた。

方法

2013 年から 2016 年 2 月までに 5 日目ガラス化胚盤胞の単一胚移植を行った 1404 周期を対象にした。凍結保存前に画像取得し、その際に収縮の有無を判定した。①拡張群と収縮群で妊娠率、流産率を比較し、②ガードナー分類で TE のグレードが A、B に判定された胚盤胞、③孵化前と孵化中の胚盤胞に分けて妊娠率と流産率を比較した。

結果

拡張群は収縮群に比べ妊娠率が高かった (52.6% vs. 32.9%)。良好な TE であっても拡張群は収縮群に比べ妊娠率は高かった (57.5% vs. 42.6%)。また孵化前胚盤胞において拡張群は収縮群に比べ妊娠率が高く流産率が下がった (47.7% vs. 29.3%、29.3% vs. 41.2%)。一方で孵化中胚盤胞では拡張群と収縮群で妊娠率、流産率に差はなかった。

考察

凍結までの収縮回数を考慮せずとも凍結前の収縮を確認することは選択的胚盤胞移植を行う際の優先順位決めの一要素となる。とくに孵化前胚盤胞においては考慮されるべきであると考えられた。